

[論文]

モノ名詞がデキゴト性を帯びる 現象について

八木健太郎

- 〈目次〉
1. はじめに
 2. 「探索」によるモノのデキゴト化
 3. 「ハジマル」・「オウル」の補語に置かれたモノのデキゴト化
 4. 「X回の～」・「X度の～」の位置に置かれたモノのデキゴト化
 5. 時間成分による連体修飾を受けたモノのデキゴト化
 6. おわりに

1. はじめに

本研究は、その語彙的意味として本来具体物（モノ）を表す名詞が、その生起する環境に関する制限に反してデキゴト性を帯びた解釈を受ける言語現象を検討し、言語主体による事態把握が言語形式に深く関与するものであるという認知言語学の主張の妥当性に傍証を付加することを目的とする。

「鉛筆」や「自転車」など、具体物を表す名詞は、「火事」や「会議」など、一定の時間の中で始まって終わるデキゴトを表す名詞と異なり、時間軸においてその形状や性質が変化するものではなく、⁽¹⁾その時間的安定性で知られている。影山（2011）では、このような名詞を「モノ名詞」と呼び、（1）の各例のように「デ格」によって存在を表す構文のガ格には立たないことや、（3）の各例のように時間成分による連体修飾を受けにくいことなどが⁽²⁾述べられている。

- （1） そこで { *鉛筆 / *ジュース / *夢 } がある。
- （2） そこで { 火事 / 会議 } がある。
- （3） # 昨日の CD, * 3 時間の鉛筆, * 今だけの自転車, # 昼下がりのポスト
- （4） 昨日の火事, 3 時間の会議, 今だけの工事, 昼下がりのコンサート

また、このような具体物を表す名詞の生起環境に関する制限としては、（5）のように、「ハジマル」や「オウル」等の開始と終了を意味する動詞の補語に立たないという制限や、（7）の各例のように、デキゴトを数える助数詞の被修飾語となりにくいことなども、同様の理由を持つ現象として挙げられる。

- （5） { *鉛筆 / *車 } が始まった / 終わった。

- (6) {火事／会議} が始まった／終わった.
- (7) 一回の {＊鉛筆／＊車}
- (8) 一回の {火事／会議}

以上のことをまとめると、具体物を表す名詞の生起環境については、少なくとも(9)のような4種の制限が関わっていることが認められる。

- (9) モノ名詞の生起環境に関する制限
 - (i) テ格によって存在場所が示される文のガ格に立ちにくいこと
 - (ii) 時間成分による連体修飾を受けにくいこと
 - (iii) 「ハジマル」や「オ瓦尔」の補語に立ちにくいこと
 - (iv) デキゴトを数える助数詞による連体修飾を受けにくいこと

しかしながら、(9)の(i)のような制限には明確な反例があることが定延(2004, 他)によって紹介されており、(iii)についても寺崎(2011)が反例を示している。

本研究は、この(9)の(i)の制限への反例に対して定延が提示した分析を支持し、寺崎が提示した(9)の(iii)の反例もこの定延の分析から捉えなおすことが有効であることを示すとともに、新たに(9)の(ii)と(iv)のような制約への反例も、定延の分析に基づいて同様に説明されることを示す。

以下本稿では、続く第2節において本研究が援用する定延の諸研究を概観し、3節では友崎が提示した反例が定延の分析に収斂可能であることを確認する。その後、第4節では新たに(iv)の制約への反例、5節では(ii)の制約への反例が、同様に定延の分析に収斂するものであることを主張する。

2. 「探索」によるモノのデキゴト化

定延 (2004b, 2016, 他) では、本来モノの存在や状態を表す言語形式が、言語主体の主體的な「探索」の結果として語られる場合にデキゴト性を帯びるという言語事実が紹介されている。⁽³⁾ 例えば、(10) の会話文における Y の発話では、モノ名詞「四色ボールペン」の存在場所が、本来はデキゴトの存在場所を示すはずのデ格で表されており、(9) の (i) の制限に違反するように思われるが、多くの日本語話者にとって自然に許容される文として成立している。

(10) X: 四色ボールペンのような便利なものは、日本にしかないでしょうね。

Y: え、四色ボールペン、北京のイトーヨーカドーでありましたよ。

(定延2016)

ここで重要な点は、この発話が単に「北京に四色ボールペンがある」という外部世界の知識を表現するものではなく、言語主体による探索の表現として認められているという点である。発話者が、「四色ボールペンが日本以外の国にあるかどうか」という探索課題を持ち、「日本以外の国」という探索領域を、メンタルスキニングを用いて「探索」した結果として得られた存在の確認を表す表現として、(10) の Y の発話は通常デキゴトの存在場所を表すデ格の使用が認められていると考えられる。

したがって、(11) に見れるように、発話者が探索領域についてすでに知り尽くしている場合や、存在自体の探索が課題となっていない場合には、その発話において発話者の「探索活動」を認めることが難しくなり、当該発話の容認度は下がることになる。

- (11) a. ?? 木なら庭でありましたよ.
 b. ?? ポケットで鍵があった. (定延2008)
- (12) [[「赤いのは日本にしかないでしょうね」と言われて、北京帰りの人間が]]
 ? 北京で赤かったですよ. (定延2002)

(11) では、「庭」や「ポケット」など、すでに話者がその場所について知悉しているような領域であったり、改めて「木」や「鍵」の存在を探索するまでもないごく限られた領域であったりするため、話者の「探索」という知的活動が認めにくく、(12) では、モノの存在の探索という言語主体の認知活動よりも、そのモノの色彩という客観的状态が問題視されているために、容認され難くなることが説明されている。

なお、定延の提唱するこの「探索によるモノのデキゴト化」は、このモノの存在場所をデ格で表す構文のみを説明するための便宜上の概念ではなく、人の言語使用に広範に関わるものであることを確認しておく。定延 (1999) では、「なんかしょっちゅうレストランがあるね」のような空間的な分布を表すかに見える頻度語がつかわれた文について、定延 (2004a) では、「ほら、あんなところにサルがいたよ」など、いわゆる「発見の『タ』」が含まれた文について、同様に探索という概念の有効性が示されている。そこで本稿では以下、このように広範な言語現象に見られ、モノ名詞の存在場所がデ格で示される現象に関して定延が用いた「探索」という概念を援用し、これまで一般にモノ名詞が生起しにくいとされてきた他の制限に関する反例も、同様にこの概念から説明され得ることを確認する。

3. 「ハジマル」・「オワル」の補語に置かれたモノのデキゴト化

前節では、(9) の (i) の制限の反例 (モノの存在場所がデ格で表される

例) が、定延によって「探索」という概念から説明されていることを見た
 が、本節では(9)の(iii)（「ハジマル」や「オウル」の補語に立ちにくいこ
 と）の制限の反例も、この定延の「探索」という概念によって生じるもので
 あることを確認する。

寺崎(2011)は、「私」、「ビール」、「橋」など本稿におけるモノ名詞を
 「具体物を表す名詞カテゴリー」と呼び、「時間性を感じるのが難しい」名詞
 類としているが、これらの名詞も移動の文脈が整えば、「ハジマル」や「オ
 ウル」の補語に立ち得るという言語事実を、コーパスのデータから紹介して
 いる。

(13) a. 長い坂が終わり、前方に冠木門が見えてきた。

b. 早くクラゲの水槽が終わってくれればいいのにと祈った。

(寺崎2011)

(13)の「長い坂」や「クラゲの水槽」はモノを表し、その存在自体はデキ
 ゴトのように時間軸の中で始まったり終わったりするわけではない。しかし
 ながら、言語主体が「坂の途中から外へと移動する」文脈や、「(水族館で)
 クラゲの水槽の前から他の水槽の前へと移動する」文脈が感じられる場合
 には、これらのモノを表す名詞も「オウル」の補語に置かれ得るという事実が
 観察される。

寺崎では、この「通常デキゴトを表す名詞が置かれるべき環境にモノを表
 す名詞が生起する事象」について、明確に定延の「探索」との関係を示し
 ていないが、本稿の立場から捉えなおした場合、ここで認められる言語主体
 の移動も、定延の言う「探索」に含まれるものであると考えることができ
 る。実際、(14)にみられるように、その移動の経路として機能するモノが、
 言語主体にとって馴染み深く、わざわざ「探索」を要しない場合や、探索領
 域が短く「探索」に値しない場合には、同種のモノを表す名詞も、「ハジマ
 ル」や「オウル」の補語に置かれることが難しい。

- (14) a. ?? そのマンションの廊下はすぐ終わる.
 b. ?? その水槽は 30cm で終わる.

(14) の「そのマンションの廊下」や「その水槽」は、言語主体がそれらを経路としたメンタルスキヤニングをするほどの長さを持たないため、その移動に探索を認めることが難しく、(13) のように「オワル」の補語に立ちえないものと考えられる。

このように、寺崎によって紹介された、モノが「ハジマル」や「オワル」の補語に立つ現象に関しても、モノ名詞の存在場所がデ格で表される現象に対する定延の分析が適応でき、認知主体の「探索」によってモノ名詞がデキゴト化すると考えることによって説明可能であることがわかる。

4. 「X 回の～」・「X 度の～」の位置に置かれたモノのデキゴト化

次に、(9) の (iii) の制限への反例について検証する。

助数詞の「回」と「度」はデキゴトの回数を数える機能を持つものであるため、通常その連体修飾はデキゴト名詞を被修飾語とするものであり、⁽⁴⁾(7) のようにモノ名詞がこれらの修飾を受けた例は容認されにくい。

- (7) 一回の [*鉛筆／*車] [再掲]

しかしながら、実際には一部、モノ名詞がその環境に生起し自然な発話として許容される例も観察される。(15) の各例は、いずれも国語研日本語ウェブコーパス (NWJC) において確認された、デキゴトを数える助数詞がモノ名詞を連体修飾する表現の実例である。

- (15) a. そのころ我が家では月に1回のカレーライスが楽しみで、その日

は夕方からそわそわして何度も台所に入入りした。

[個人ブログ]⁽⁵⁾

b. 2度の原子爆弾を投下された日本は、世界唯一の「被爆国」として世界に知られている。

[個人ブログ]⁽⁶⁾

c. 人生であと何回の桜を楽しむことができるか考えたことありますか？

[個人ブログ]⁽⁷⁾

これらの例に関しても、「ある人物の一月間の食事の履歴」や「日本のこれまでの歴史」、「ある人物の今後の個人史」といった時間軸上の「探索領域」が容易に設定され、その探索領域において「食卓にカレーライスが出るかどうか」や「原子爆弾の投下の有無」、「桜を見た経験の有無」といった履歴の探索が想定され得るために、本来モノを表す「カレーライス」や「原子爆弾」、「桜」が、言語主体の「探索」の結果発見されるデキゴトとして把握され、「回」や「度」によって数えられる文としての容認度が上がっているものと考えられる。

したがって、同様の形式を備えた名詞句であっても、モノ名詞が探索に値するような「探索領域」を想定しにくい場合や、そのような履歴の探索が想定されにくいような場合には、モノ名詞をデキゴト性の助数詞で修飾した文の容認度は下がることが予想されるが、実際に(16)の各例のように言語主体の探索を感じにくい例は容認度が下がる。

- (16) a. ?? 彼は短時間に3回のカレーライスを食べることができる。
 b. ?? その技術者は3度の原子爆弾を {破棄／解体／消却} した。
 c. ?? 毎回の桜を見た。

(16a) では、3杯のカレーライスの完食が短時間で行われているため、1杯ごとの完食の有無を確認していくような捉え方が自然になされない。一般に我々は、数日間の期間において何を食べたかということを確認することはあ

っても、ごく短時間のうちに連続して行われた行為は一括して把握でき、その一つ一つが行われたかどうかを確認するということはしない。また (16b) においては、(15b) の「国の歴史」のように、ある程度の時間と労力をかけて振り返るべき探索領域を適切に想定することが難しいため、相対的に容認度が下がるものと考えられる⁽⁸⁾。

また、これら「X 回の〈モノ名詞〉」や「X 度の〈モノ名詞〉」の容認度に「探索」が関わっているという本稿の主張は、以下 (17) と (18)、あるいは (19) と (20) のような例文の容認度のコントラストにおいても確認される。

- (17) a. 3 回の桜を見た。
 b. 3 回の桜を楽しんだ
 c. 3 回の桜を逃した
- (18) a. ?? 3 回の桜が咲いた
 b. ?? 3 回の桜があった
 c. ?? 3 回の桜が散った。
- (19) a. 3 回のカレーライスを食べた。
 b. 3 回のカレーライスを満喫した
 c. 3 回のカレーライスに喜んだ
- (20) a. ?? 3 回のカレーライスが出た。
 b. ?? 3 回のカレーライスが食べられた。
 c. ?? 3 回のカレーライスが作られた

(17) や (19) の各例は、桜やカレーライスに関する主語の体験を述べる文であり、主語の行動の履歴を探索領域とし、桜やカレーライスにまつわる体験が何度あったのかを探索する発話として解釈されやすく、そのために容認度は高い。しかし、同じ名詞句が使われている (18) や (20) の各例は、桜や

カレーライスそのものについて述べる文であり、主語や認知主体が桜やカレーライスに関する経験の有無を探索する発話と捉えにくく、相対的に容認度が下がっているものと説明することができる。

5. 時間成分の連体修飾を受けたモノのデキゴト化

最後に、(9)の(ii)の制限への反例について検証する。(3)の各例のように、影山(2011)では、モノ名詞が時間成分による意味的限定を受けにくいことが述べられている。

- (3) #昨日のCD,*3時間の鉛筆,*今だけの自転車,#昼下がりのポスト
[再掲]

「昨日のCD」や「昼下がりのポスト」に関しては、解釈に曖昧性が残り、「意図した意味に唯一的に解釈できない」とされ、「3時間の鉛筆」や「今だけのポスト」に関しては、「言い方自体が意味をなしていない」と評価されている。

一方、西山(2003)では、これら時間成分の連体修飾を受けたモノ名詞の文法性自体は問題視しておらず、「あの時の横綱」という名詞句を例に、この構文には(21)のような3種の解釈が可能であることを示している。

- (21) 「あの時の横綱」の解釈の可能性⁽⁹⁾
- ① 〈「あの時」横綱の地位にあった人〉
 - ② 〈現在の横綱の中から「あの時」によって同定される人〉
 - ③ 〈特定個人の横綱の時間の流れの中から「あの時」で切り取られた断片〉

実際、モノ名詞が時間成分による連体修飾を受けた構文は、(21)のような3つの解釈間での曖昧性が存在し、いずれかの意味で解釈可能な例文は枚

挙に暇がない。つまり、(9)のivの制限は、語の選択制限に関わる意味論レベルのものではないものと考えられる。しかし、本稿の立場からこの構文を見ると、なお、(22)のような例がなぜ(21)の3種のそれぞれの解釈を自然に得られないのかという語用論レベルの問題が残される。

- (22) a. ?? 1867年の漱石が生まれた。
 b. ?? 5月7日のティファニーさんが我が家に来た。
 c. ?? 6時3分の鉛筆を買った。

(22a)の「漱石」は特定個人を示す固有名詞であるため、名詞句「1867年の漱石」に(21)の①や②にあたる解釈が生じることはあり得ないが、③にあたる〈1867年の時点の特定個人の漱石〉といった解釈として、なぜこの文が自然に容認されないのかは明らかでない。また、(22b)の「ティファニーさん」に関しても、③にあたる解釈(〈5月7日の時点におけるティファニー〉)としては不自然である。さらに、(22c)の「6時3分の鉛筆」は、(21)の②にあたる解釈(例えば〈6時3分に話者が見つけた鉛筆〉)としては容認されるものの、③にあたる解釈(例えば〈6時3分の時点の特定の鉛筆〉)としては容認されない。

このように、モノ名詞が時間成分の連体修飾を受けた表現には3つのタイプの語用論的解釈が存在し、特に(21)の③の解釈(【時間領域NP1における、NP2の指示対象の断片の固定】)に関しては何らかの制限があることが明らかであるが、このタイプの解釈の可否も定延の「探索」という概念から説明することができる。(22)において〈ある一時点における特定の個体〉としての解釈が認めにくかった「漱石」や、「ティファニーさん」、「鉛筆」等のモノ名詞も、(23)のように言語主体の「探索」が認められる文脈においてはその解釈での容認度が上昇することが確認される。

- (22) a. 明治40年の漱石は『虞美人草』を書いたのみでしたが、翌年には

『坑夫』、『文鳥』（鳥居素川の要望を受けて「大阪朝日新聞」に掲載）、『夢十夜』、『三四郎』が書かれ、名作が次々と朝日新聞の紙面を飾りました。⁽¹⁰⁾ 「趣味時間」

b. 《アイドル歌手の動画を解説するファンの文章》

ナイスショットがいくつもありますが、2分24秒のティファニー、3分25秒のテヨン、48秒のジェシカでしょうか。いやあ、これは⁽¹¹⁾いい曲。そしていい動画です。 「個人ブログ」

c. 《マジシャンがテーブル上の鉛筆を消す動画を解説する文章》

そのマジシャンによって、6時3分の鉛筆が急にテーブルの上から姿を消した。 [作例]

(22a) は作家夏目漱石の履歴を辿る文章の一節であり、時間軸に沿って漱石の業績を「探索」するという文脈の中で、モノ名詞「漱石」が時間成分「明治40年」の連体修飾を受けているが、そのような「探索」が感じにくい(21a)と対照的に自然に容認される文となっている。また、(22b)と(22c)はそれぞれ、アイドル歌手とマジシャンのパフォーマンスを記録した動画を解説するものであり、発話主体と聞き手の双方で動画の一瞬一瞬にどのような出来事が生じるかを「探索」するというタスクが共有されている文脈になっているが、(21b)や(21c)では時間成分による一時点の切り取りが認めにくかったモノ名詞（「ティファニー」と「鉛筆」）が、時間成分による意味的限定を自然に受ける例となる。

このように、本来時間的に安定し時間成分による意味的限定を受けにくいモノ名詞も、発話主体と聞き手の間でそのモノの履歴や限られた時間の動画などの探索領域が文脈上認められ、その探索領域においてモノに関わる有意義なデキゴトが生じるかどうかという「探索」が関わる場合には、モノ名詞がデキゴト化することが確認される。

6. おわりに

本研究では、定延の一連の研究において提唱されている「探索」という概念を援用し、本来時間的に安定した意味を持つモノ名詞がデキゴト化する事象について説明した。定延の「探索」の概念自体は、「ダケ」・「シカ」・「バカリ」などの取り立て詞や発見の「タ」など、日本語の文法に広範に関わるものであるが、その一例として挙げられている、モノの存在場所がデ格で表される現象が、この「探索」という概念から説明されるという主張に基づき、本稿では、通常モノ名詞が生起しにくいとされるその他の環境においても、同様に言語主体の「探索」という概念の関与によって、本来の文法体系から逸脱してモノ名詞のデキゴト化が認められることを確認した。

〔注〕

- (1) Givón (2001 : 51-53) では、言語類型論的観点から、名詞の概念上の規定の一つとして「時間的安定性 (temporal-stability)」を挙げており、shoot や kick など、一定の期間のみ生じる出来事を表す動詞に対して、時間的安定性のスケールの対極に位置するものであるとしている。
- (2) (1) から (4) の例文は、その判定を含めて影山 (2011 : 38) からの引用である。なお、「*」の記号は「言い方自体が意味をなさない」こと、「#」の記号は「意図した意味に唯一的に解釈できないこと、あるいはいろいろな解釈が可能であること」を示すとされている。
- (3) ここで援用する定延の「探索」という概念は、より高次の「体験」という術語に包含されるものであると思われるが、本稿では紙面の都合から「探索」と「体験」の関係には言及を控える。詳細は、定延 (2002) を参照のこと。
- (4) Iida (1999 : 182) では、助数詞の「回」と「度」を「行為や出来事を数えるために使われる助数詞 (classifiers for counting actions and events)」とした上で、両者の使い分けについて、「回」は「定期的な継続・反復が期待・予想される行為や出来事を数える場合に多く用いられ」、「度」は「定期的な継続・反復が期待・予想されず、次の行為や出来事を予測するのが困難な場合、あるいは予め行為や出来事の反復数が分かっていない場合に用いられる傾

向が強い」と述べている。「回」と「度」の意味機能の違いについては、本稿の考察課題に関与するものではないため、出来事を数える助数詞として同列に扱うこととする。

なお、Iida では「週3度の味噌汁、単身サラリーマンの平均」という新聞のヘッドラインから引用した実例も紹介されているが、モノ名詞である「味噌汁」が用いられたこの例と、デキゴト名詞が用いられている他の例文との異同については言及されていない。

- (5) 「不可視の世界に」(<http://hukasino.blog68.fc2.com/blog-category-30.html>)
- (6) 「めざせ！温泉入浴指導者への道」(<http://badenbadenjpn.blog110.fc2.com/blog-date-201104.html>)
- (7) 「子供と一緒に大きくなるう」(<http://with-kids.seesaa.net/archives/201203-1.html>)
- (8) 例えば、ある技術者のこれまでの仕事の履歴を振り返るという文脈を想定すれば、「彼はこれまでのキャリアの中で3度の原子爆弾を解体している」という発話も相対的に容認度が上がるものと思われる。
- (9) 西山(2003)の術語では、①の解釈は、NP2(「横綱」)が「非飽和名詞」でNP1(「あの時」)がそのパラメータの値として機能するタイプ、②の解釈は、NP1(「あの時」)とNP2(「横綱」)に何らかの関係Rがあるタイプ、③の解釈は時間領域NP1(「あの時」)における、NP2(「横綱」)の指示対象の断片の固定されたタイプとされる。
- (10) <https://hobbytimes.jp/article/20161223a.html>
- (11) 「タップダンスマリネズ」(<http://tappdancemarines.blog107.fc2.com/blog-entry-596.html>)

[参考文献]

- 宇都宮裕章(2001)『数えることば—数えることをめぐる認識と日本語—』日本図書刊行会
- 影山太郎(1980)『日英比較語彙の構造』松柏社
- 定延利之(1999)「空間と時間の関係：『空間分布を表す時間語彙』をめぐって」『日本語学』vol. 18-9：24-34
- 定延利之(2001)「探索と現代日本語の『だけ』『しか』『ばかり』」『日本語文法』vol. 1-1：111-136
- 定延利之(2002)「『インタラクションの文法』に向けて：現代日本語の疑似エビデンシャル」『京都大学言語学研究』vol. 21：147-185

- 定延利之 (2004a) 「ムードの『た』の過去性」『国際文化学研究』 vol. 21 : 181-198
- 定延利之 (2004b) 「モノの存在場所を表す『で』?」『日本語の分析と言語類型 : 柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版 : 181-198
- 定延利之 (2006) 「動態表現における体験と知識」『日本語文法の新地平 1 形態叙述内容編』くろしお出版 : 51-67
- 定延利之 (2008) 『煩惱の文法』筑摩書房
- 定延利之 (2012) 「『体験』型デキゴトをめぐる研究の経緯と新展開」『日中理論言語学の新展望 2 意味と構文』くろしお出版 : 107-123
- 定延利之 (2016) 『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房
- 寺崎知之 (2011) 「名詞に含まれる時間性の考察 : 『始まる』『終わる』で示されるものを通して」『日本認知言語学会論文集』 vol. 11 : 477-483
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語彙論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 八木健太郎 (2017) 「非動作性名詞をヲ格にとる『スル』文の振る舞いについて—換喩からの統一的説明—」『中央学院大学人間・自然論叢』 vol. 43 : 3-38
- Givón, Talmy (2001) *Syntax. Volume I*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Iida, Asako (1999) "Classifiers for Counting Actions and Events: Comparison between 'kai' and 'do'", *Tokyo University Linguistics Papers*, vol. 18: 162-182

【コーパス】

国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)